

Title	経済価値論 ( 四 )
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.2 (1919. 2) ,p.229(81)- 241(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190201-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190201-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

正 誤

本誌前號「ノルマン朝の裁判制度」三頁及び三頁に「探湯試罪法」とあるは「投水試罪法」の誤りに付訂正す。

雜 録

經濟價值論 (四)

野村兼太郎

六

こゝに暫く認識論のものに就て考へて見たい。吾人が認識すると云ふ時は、常に認識されるあるあるものを豫想する。即ち認識する主観の外に認識せらるゝ對象が無ければならない。換言すれば認識する主観に對する客観の存在を必要とする。此の主観對客観の問題は甚だ困難な問題である。何故なら主観的存在と云ふも、他の主観に對しては客観である。すべての客観的存在もそれ自身に於ては主観に外ならない。

併乍ら今此の主観對客観の難問題を解決しやうと云ふのではなし。Rickerが其の著「認識の對象」"Der Gegenstand der Erkenntnis."に於て客観と云ふ語に三様の意味を認め、(一)自己の身體以外の空間的外界(二)全體の「自存的」世界即ち超越的客観、(三)意識内容即ち内在的客観として居るが、今はその何れが誤れる客観を包含して居るや否やに就て論究しやうと云ふのではない。斯如き種々なる意義を有する客観——換言すれば多種多様の相を現する外界世界は要するに是を認識するもの即ち主観以外のすべてのものであらう。然らば主観とは如何なるものを云ふのか。主観とは吾人の認識の主體であつて、或ひはこれを抽象的なる超越的「自我」とも云ふべきであらう。斯如き「自我」があるものを認識する際にはこゝに先驗的なるあるものが存在しなければならぬ。即ち我々があるものを

認識すると云ふのはその世界構成に於てその先験的原理と一致することを必要とするのである。

こゝに至つて吾人は Kant の偉大なる研究を想起せざるを得ない。Kant 以後の哲學的思索は常に Kant を離れることが出来ない。勿論 Kant 以後と雖も我々の畏敬すべき哲學者が無いと云ふのではない。J. G. Fichte と云ひ、Hegel と云ひ、Schopenhauer と云ひ、近くは Windelband と云ひすべて皆吾人に教ふる所甚だ大なる哲人である。併し是等すべて Kant より脱出することを得ない。吾人がこゝに認識の主體を論ずるに當つても亦 Kant の立場に立脚しなければならぬ。即ち認識に對する思惟の先験的なる原理を離れて對象世界と云ふものを構成することは出来ない。我々があるものを認識する場合にある先験的原理に一致させて考へ

る。

ある一つのものを認識する。例へば一箇の茶碗を認識するとする。此の場合甲の認識する茶碗と乙の認識する茶碗と全く同一であるか如何かは疑問である。併乍ら吾人は「茶碗」と云ふ比較的普遍的なる概念を構成する。此の概念構成の過程に於て、すでに一の先天的なるあるものを必要とするが、今は暫く是を問題外とし、吾人は斯如き普遍的なる茶碗一般を認識する以外に、ある茶碗と云ふが如き箇別的なものを認識する際にすべての者が同一の認識をするであらうか如何か。同じ茶碗であつても是を認識する主體に依つて異ならなければならぬ。従つてかゝる相異なる認識を基本とせる判断も各人に依つて異ならなければならぬ。ある者は是を飲み心持のよい茶碗であるとなし、又ある者は美的構造の優れたるものであるとなし、又ある

者は其の堅牢なる點を觀賞し、若しくはその茶碗の品質をのみ觀察するだらう。是等の判断は「茶碗」と云ふ概念の中には包含されて居ない種類の判断である。併乍ら我々がある茶碗を認識する際には、概念的に描れたる茶碗を認識するのではなくして、斯如き特殊性の附随せる箇別的な茶碗を認識するのである。但し吾人がある茶碗を認識しても、そのすべての特殊性を同時に認識するのではない。若し是を心理的に云ふなら認識すると同時にそこに何等かの物件の存在することを意識し、やがて白い小さい茶碗だと意識し、それから後、手にとつて眺めて見て或ひは是は珍しい焼物であるとか、或ひは是は伊萬里焼であるとか、その茶碗の各種の特異な判断が下される。然もその判断はその茶碗のある一面に過ぎない。即ちある者は是を美的に判断し、又ある者は歴史的若しくは地理的に判断

する。而してこゝに注意すべきは斯如き判断を下す其の根底に價值を置いて居ることである。即ちあるものをある一定の立場より見て價值的判断を下す時、其の立場に於ての其のものが認識されるのである。美的修養の高い者にはそのもの、美的方面が認識されるが、美的修養を欠如して居る者にとつては殆ど全く認識することは出来ない。

斯如く同一物であつても種々なる方面があるが、吾人が是を科學の對象として取扱ふ場合には必ず概念化されて居なければならぬ。何故ならば科學は畢竟するに知識の集合であつて、文字若しくは言語あつて始めて存立し得るものである。然るに言語文字の表現は常に概念に存するからである。従つて科學に現されたる「もの」の種々なる方面も概念に依つて表現されることは疑を容れない。然らば斯如きある方面よ

り見たるもの各自に依つて異なる價值判斷が科學的判斷として取扱はるゝや否や。斯如きは寧ろ主客顛倒の疑問の如く思はれる。すべて科學はある立場より見たる判斷の綜合である。例へば物理的立脚地より見たる概念の世界である。經濟學は經濟的立脚地より見たる概念の世界である。前者は物理的に綜合され、後者は經濟的に綜合されて居る。唯こゝに注意しなければならぬのは前者の沒價值的で普遍的であるに反して後者の價值的で箇別的であることである。併乍ら是が絶對的區別であることを是認し得るであらうか。成程箇々の例證に依つて見る時は物理學は沒價值的で普遍的である。然しそれも價值と云ふ言葉の意義を狭い文化價值とする時に限られる。あるものを物理的に見ると云ふのはそのもの、物理的方面を認識すること換言すれば物理的價値の認識と云へないであらうか。

又物理學と云ふも要するに人間文化の所産ではないのか。勿論斯く云ふ時は價值と云ふ言葉を餘りに廣汎に解し過ぎた恐がある。唯余は是を以つて絶對的なる科學の分類となすことに疑問を抱懐する者である。且又、物理學換言すれば所謂自然科學が普遍的なりとするけれども是亦相對的のものではないのか。少くとも Bergson の云ふ同時存在の形に於て見た時に限られて居りはしまいか。然らば斯如き分類は要するに相對的即ち程度の相異に過ぎなくはないのか。此の點に關しては哲學論でない本論の主旨に反するから是れ以上論究するのを止める。

以上述べ來つた所に依つて極めて疎略ではあるが一般的に科學の本質を略々明にした。客觀即ち實在の世界を概念に依つて表現し、其の概念化されたる實在世界をある立場より綜合統一したるものが科學である。ある立場と云ふ意味

を更に嚴格に云へばその科學の選擇目的 *Auswahlzweck* であり且つ左右田博士の所謂嚮導觀念たる先天的要素を基本としてと云ふ意味である。吾人が認識を論ずる際に述べた如く、例へば自然科學的認識を是認するには自然界構成の思惟の先驗的原理に一致するを必要とする如くに、吾人が科學を構成するに當つて常に其の目標とし、且つ對象物のそれと一致する點をのみ本質的として是れを受け容れる先天的要素を必要とするのである。

七

再び經濟學の問題に立戻る、前述の如くすべてのものは一方面的のものではない。すべて種々なる方面を有して居る。例へば一つ茶碗でも美術的にも、經濟的にも、歴史的にも、物理的にも、法律的にも見られる。即ち云ひ換へれば美術的價值判斷もされ、ば經濟的價值判斷も下

される。今は假りに問題を經濟學の範圍にのみ制限する。あるものが經濟的價值判斷が下された場合に、即ちあるものが經濟學の先天的要素と一致すると認識せられるとそのものは「經濟價值」を有つて居ると云はれる。假令經濟學の先天的要素と一致する「經濟的價值」を持つて居るとしても、若し吾人が是を認めないで何等の價值判斷をも下さないとしたなら、其ものには「經濟價值」はない。此の兩者の關係は直ちに移動して效用性と效用との關係に適用することが出来る。吾人があるもの、效用性を認めるとそのものは效用ありとされるのである。即ち效用性と云ふのは靜的なる經濟的價值を動的方面から觀察して云ひ表はしたに過ぎない。同様に效用と云ふのは經濟價値の動的表示に外ならない。故に效用ありと云ふのと經濟價値ありと云ふのとは同じ意義である。經濟價値ありと云ひ若し

くは效用ありと云ふのはあるもの、經濟的方面を認めることである。換言すればあるものを經濟的アズリオリに一致させることである。が、そのものが先天的要素に一致する時に始めて吾人が是を認識し得るのである。

然らば空氣の如きは如何だらうか。空氣は明に「經濟價值」はない。然し果して「經濟的價值」も無いだらうか。即ち稀少性に關する問題が起つて来る。空氣が經濟價值が無いと云ふのは其の經濟的價值が無いのではなくして、唯是を認識する必要を欠如するのである。又地中の鑽石、人に知られざる「ダイヤモンド」が經濟價值を持たないのは是が認識する範圍外にあると云ふに過ぎない。恰も吾人の眼に觸れざる物體の存在が所謂認識されないと同様である。然乍ら斯如く認識されないと云ふのも要するに吾人が認識する必要を欠如して居るに外ならない。

する要求が必要である。吾人が犬を知覺した場合、それが犬であることを知る必要の無い限り犬としての認識は起り得ない。稍心理的ではあるが其の場合には何か居たと云ふやうな知覺を意識するに過ぎない。若しくは全然何にも意識しないかも知れない。然らば斯如き要求は何であらう。余は是を吾人の意志の要求 *Willensfor-*  
*derung* であると思ふ。吾人が犬を認識した場合吾人は是を馬とも猿とも認めることは出来ない。矢張り犬と認めなければならぬ。此の點は吾人の意志の力の及ぶ範圍でない。然し其の犬を犬として認識する際には意志の要求を待たざるを得ない。斯如き意志の要求の根本、及び意志の自由等に關しては更に多くの問題を有して居る。然しこゝでは吾人が認識する際に意志の要求を必要とするに止めて置く。

吾人が經濟的價值を認識するのも同様である

再び一般の認識に就て考へる。認識と云ふことは單なる知覺ではなくて其の先驗的原理に一致することであるから、「是は犬である」と云ふ判断の生ずるのは單に吾人の主觀的作用で犬と云ふ概念を構成する以上に、ある必然的な力を認識に必要とするのである。かの *Poin Caré* の所謂感官の證明 *Le témoignage de mes sens* と云ふのも恐らく斯如きものを云ふのではないだらうか。而して彼の云ふが如くこゝへは吾人の自由に入るべき餘地が無いのである。更に斯如く吾人の關係し得ぬ超越的な力の外に、人が「是は犬である」と云ふ判断を下す際に、吾人をして斯如く判断せしむる強制力がなければならぬ。單に意識せられ若しくは知覺せられると云ふ以上に、體驗 *Erlebnis* として一般的判断を形成せんとする要求が無くてはならぬ。そのものが先驗的原理に一致するや否やを知らんと

其の經濟的價值を認識する必要即ち意志の要求を感じた場合に、其のものに經濟價值ありとされるのである。例へば空氣や水に經濟價值を認めないのは恰も往來の犬を認識しなかつた場合と同様である。若し認める必要を促された場合は即ち大都會に於て水に經濟價值を認むるやうに吾人は其のもの、經濟的價值を認識する。斯如き必要を促すのは經濟學に於ては其のもの、稀少性換言すれば其のものを獲得するに労働を必要とすることである。労働と價值との關係は既に以前に述べた。今はあれ以上述ぶる必要を見ない。

以上述べて來た點に於ては未だ明に價值を對社會の問題として取扱つて居ない。勿論價值の根本に一の普遍性を認むることに依つて價值の客觀性を述べて居ないではないが、更に實際問題に於て社會的に價值を考へて見たい。經濟學

が純粹なる社會的科學として、かのロビンソンクルソー式の思考方法を排して、一の文化的社會の產物として考察しなければならぬ以上、其の價值論も亦是に依らなければならぬ。併し此の問題に先立つて先づ文化的社會の意義を鮮明にする必要がある。文化的とは何を云ふか？吾人は先づ此の疑問を考へて見やう。

八

文化と云ふ字の意義解釋に關しては、古來幾多の學者の論ずる所必ずしも同一でない。是等幾多の異論を攻究して其の中より眞意義を發見せんとするは有意義の研究ではあるが今は其の餘裕を持たぬ。余自身の考へる所に依れば文化とは「眞」の世界を求めんとする意志の要求に依る人間の努力が作成したる事象の全體を云ふ。故に假令それが人間の努力に依つて作られたるものであつてもそれが斯如き意志の要求に従は

ない時はこれを文化の產物とは云ひ得ない。勿論社會に於ける多數の人間は斯如き意志を意識しては居ない。併乍ら彼等は斯如き意志を意識せずして斯如き意志の下に努力して居るのである。車夫が車を挽く事は車夫自身にとつては生計のためであつて何等斯如き意志を自覺しては居ないが、彼が車を挽いたために斯如き意志の努力に對して一の貢獻をなして居るかも知れない。然し車夫自身は何等の自覺をも有して居ないから時に斯如き目的に對して全然無意義な努力をなして居ることが無いとは云はれない。かかる場合には勿論文化に對して何等の貢獻をもなさない。

次に文化的社會とは何を云ふか。文化的社會とは斯如き努力をなす人間の有機體的組織を有する團體を云ふ。故にそれは單なる人間の集合であつてはならない。團體それ自身に統一を有

する集合で無くてはならぬ。又文化的と云ふ以上それは人間に限られる。成程蟻や蜂も一の社會を形成する。彼等は時に人間以上とも思はれるやうな統一された組織を有つて居る。類人猿等に至つては野蠻人以上に優れた意識を持つて居るかも知れない。故に斯如き標準よりしては是等の間に區別を認めることは困難であるが、唯こゝでは文化と云ふことそれ自身にすでに「人間の」云ふ意味を包含して居るのである。故に文化的社會と云へば蟻や蜂、乃至類人猿の社會は勿論算へない。

然らば斯如き文化的社會と經濟學との關係如何。勿論經濟的生活は人類の文化生活の一方面たることは疑を容れない。併乍ら經濟的生活の最も進歩したる時が吾人の文化生活の最高に達した世界ではない。經濟學は前にも述べたるが如く常に生存を前提として居る。故に若し生存

を超越したる如き價值の世界——例へば宗教的生活の如き、よし文化生活に多大の貢獻ありとするも經濟學にとつては全然沒關係の世界である。而して經濟學は又かかる生存を前提とする生活の物質的方面にのみ干與する。

吾人はこゝに生存すると云ふ疑ふべからざる事實よりして生存してゆく權利を取得する。而して此の權利に對して一の義務を負擔する。即ち文化生活——より高き文化價值に到達せんとする生活に何等かの寄與をなさねばならぬ。これを經濟上より云へば勞働をなさねばならぬ。然し又是を他の方面より見れば勞働をする權利を有するとも云へる。生存し勞働する力を有する者は是を充分に使用享樂する權利を有すると共に義務を有する。而して是亦經濟上の財に關しても同様に云ひ得る。財を所有する者は其の財を充分に使用享樂する權利を有すると共にし

かする義務を負担する。換言すれば財の經濟的價值を充分に發揮させることの出来ない者は其の財を所有する権利を持たぬ者である。例へば大都市の中央に大なる土地を所有する者がその土地を荒野の儘に棄て、置くなら、其の者は土地の所有權を喪失すべきである。現に鑛山採掘權や殖民地に於ける土地所有權等の如き是を利用する義務を課せられたる如きは其の好適例ではあるまいか。

斯如き意義を有する文化的社會に於て經濟價值を有するもの即ち財に對してなす評價如何と云ふに、現在の社會制度の下にあつては未だ各人に對して生存權すら認められて居ない。況して勞働權は認められて居ない。従つて客觀的に見ても各人の財に對する評價は異ならざるを得ない。明日の生活すら保證されて居ない人々と何等生活に不安の無い人々との間に於ける價值

判斷は同一であり得ない。ある者は一箇の帽子に對して五圓以上支出することを拒む間に他の者は十圓迄支出する餘裕を持つ。これが現在に於ける實際社會の状態である。又各人の趣味嗜好の異なるに従つて同一物に對して異なつた價值判斷を下す。斯如く箇人々々の價值判斷を考ふる時には殆ど同一の者を發見するに苦しむだらう。

併乍ら吾人は社會全體を一の評價主體と見ることが出来る。而して各箇人々々は其の評價主體の一の Exemplar と見る。恰も各人は各自の意志を有して居るが、其の各人の意志と全然別に而も各人の意志を基礎とした團隊的意志表示をなし得るが如きものである。各箇人の評價は殆ど大體に於て社會的評價に従ふことは亦團隊的意志に服従する各箇人の如きものである。然らばかゝる社會的評價は如何にして形成せらる

るのであらうか。從來經濟學者が需要と供給との關係より數量的歸結を求めしが如く如斯簡單には考へ得ない。若し斯如く經驗的にのみ考へるならば殆ど何等の歸結をも得ないであらう。よし得らるゝとしても其の得たる所の結果は單に机上の論結に過ぎないだらう。社會的評價が經驗的に得らるゝことは事實であるが、かゝる經驗的評價の根柢には超越的價值判斷がある。恰も概念構成が純經驗的と見らるゝに拘らず、其の根柢に先天的なるものを必要とする同一である。以前に述べたるが如く經濟的價值を認識する各箇人が一の團隊を組織して一の財の價值を判斷する際にも、尙ほ其の判斷を生み出す一の超越的なる力に依つて統一されなければならぬ。而してこゝに斯如き社會的評價が客觀性を有するやうになる。

現今の社會制度が極めて不完全であることは

一般識者の認むる所であるが、殊に經濟的方面に於ける社會的欠陥は其の最も甚しい點である。吾人は暫々「進化」Evolution と云ふ言葉を使用する。而して若し普通云ふが如く此の言葉の意義を簡體の環境 Milieu に對する應化 Adaptation であるとするとするならば、現在の社會殊に經濟的方面に於ては斯如き應化が各箇體に與へられて居ない。然るに現在の社會にあつては他方に於てすでに應化せる簡體によつてなされたる價值判斷が行はれ居る。而して現在の一般的社會的評價は是を基本として居る。其の必然の結果としてその應化せざる簡體は生活體 Lebenswesen として必要欠く可からざる自己保存の可能性 Fähigkeit der Selbsterhaltung をすら危くされるに至る。即ち現在に於ける無資産者階級の如きそれである。こゝに於て余は現在の如く社會的評價の主體を資産者階級に限る前に先づすべ

ての箇人に對して自己保存の可能性を確實にするがために生存權を認めなければならぬと思ふ。

九

以上述べて來た所に依つてすでに明かなる如く經濟學は文化社會に於ける經濟的方面の認識に外ならない。即ち「與へられたるもの」としての經濟的生活の研究である。而して經濟的生活は常に經濟的價值に關與せる生活でなければならぬ。經濟的價值と云ふもそれは一の給付 Leistung である。あるものが經濟的價值ありとするのは其のものが何等かの給付をなすからである。而して斯如き經濟的給付に對する各箇體の要求の Intensität に從つて之に經濟價值が生ずる。此の經濟價值を有するものを財 (Gut) と名付ける。其の抽象的のものであると具體的の物であることを問はない。斯如く財の意義を廣汎

に解することが果して適當なりや否やは論じなければならぬ問題ではあるが、今は暫く是を問題外として後日に譲る。

斯如くして吾人は再び經濟價值に二つの要素のあることを知る。即ち一は物自體の價值、他の一つは其の物に對する要求より生ずる價值である。此の兩者は恰も盾の兩面の如く、其の一方を除いては經濟價值は存立し得ない。而して其の根柢に於て兩者ともに單なる主觀的にあらざる先天的要素を認むる者である。

即ち先に述べたるが如き意義による「財」は、法律學に於ける權利義務の觀念の如く、經濟學に於ける中心觀念であつて「財」に關するすべての現象は直ちに經濟學の範圍に屬する。尙ほ財に關しては更に一層の研究を必要とする。

余が從來述べて來た所は極めて概略であり粗雑であつた。論ずべくして論じなかつた問題が

甚だ多い。而も單に疑問を羅列したに止まつて確乎たる解釋をすら與へて居ない。併乍ら余が考へんとする思索の傾向は略々明にした積りである。一箇の理想論者としてよし淺薄であるとしても自家の世界觀から出發して經濟學を解釋せんと欲する其の Präludium として此の小論文を草する。幾多の問題を眼前に控へて自己を顧る時は恰も手を拱いて望洋たる大洋を眺めるやうな思ひがある。(一九一九年一月二〇日稿)(完)

『本邦鑛業と金融』を讀む

松 崎 壽

最近公刊せられたる表題の如き一書は早稻田大學理工科講師工學士上野景明及び同大學政學士三上徳三郎の兩氏が、各々其研究調査せられ

たる所を融合加味して大成されたものである。而して本書編述の目的は著者の序言によれば『敢て専門的技術に偏せず、又經濟的營利のみを主眼とせず』技術家に對しては鑛業經營の要領を知るの參考となり、又資本家に對しては鑛業技術の大意を會得するの一助となることを期したものであると云ふ。通讀したる所著者の此目的は大體に於て達せられて居ると思はれる。蓋し我國に於て從來鑛業に關する著作と云へば、技術的方面の研究のみを取扱つたものであつて其經營殊に鑛業資金の調達等の問題を論じたものは絶無である。然るに著者等が此方面の研究の極めて必要なることに着眼して、先づ本書を公にされたことは洵に卓見と言ふべく大に其勞を多とせざるを得ない。評者の喋々する迄もなく世の營業者が本書の示す所によりて更に實際的の堅實なる方針を立てたならば、恐らくは經